

ブラジル特報



特集「日系コミュニティ再考」

- ・ブラジル日系社会は Honestidade と Respeito
- ・サンタクルス病院 ～その歴史と新しい挑戦
- ・『ブラジル日系人経営者 50 人の素顔』
下巻編発行の目的と意義について



あの町この町
トメアスー Tomé-Açu



一般社団法人 日本ブラジル中央協会

URL <http://nipo-brasil.org/> E-mail info@nipo-brasil.org

〒105-0004 東京都港区新橋 1-18-2 明宏ビル本館 5 階 TEL:03-3504-3866 FAX:03-3597-8008 発行人：大前孝雄／編集人：岸和田仁

新規会員募集中！

詳しくは P21 をご覧ください。



世界の未来を、ブラジルとつくる。

〔Business innovation-1〕

鉄鉱石を安定供給し、世界経済の発展を支える。
ヴァーレ社を通じ、世界最高水準の高品位鉄鉱石を供給。増大する鉄鋼需要に応える。

〔Business innovation-2〕

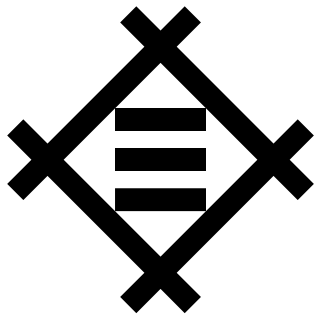
水力発電事業を通じ、低炭素社会へのインフラ構築に貢献。
川の自然な流れを活かす流れ込み式水力発電事業を通じ、約1千万人分の電力を大都市圏へ供給。

〔Business innovation-3〕

ブラジルで、そして世界へ。コーヒーと共に至福のひとつときを。
Mitsui Alimentos社を通じ、半世紀にわたり愛される「Café Brasileiro」を製造・販売。
これからも豊かな食文化をお届けする。

世界の未来を、世界とつくる。三井物産

三井物産株式会社 www.mitsui.com



MITSUI & CO.

目次

あの町この町 トメアスー [山田祐彰]	3
ブラジル・ナウ 高まる大学の起業家精神、新産業に期待 [松野哲朗]	5
【特集】日系コミュニティ再考 ブラジル日系社会は Honestidade(正直で誠実)と Respeito(礼節と気づかい) [細川多美子]	6
【特集】日系コミュニティ再考 サンタクルス病院～その歴史と新しい挑戦 [柳澤智洋]	8
【特集】日系コミュニティ再考 『ブラジル日系人経営者 50 人の素顔』 下巻編発行の目的と意義について [菅野英明]	10
駐日ブラジル大使より～着任のご挨拶 [エドゥアルド・バエス・サボイア]	11
ブラジル現地報告 期待を担ったボルソナロ政権の発進 [永井 忍] ...	12
連載・日系企業シリーズ第 57 回 KIKKOMAN ブラジル市場への挑戦 [秋元壮介]	13
連載・ビジネス法務の肝 「ハラスメント」の実務 [柏 健吾]	14
連載・税務の勘どころ 「BLOCK K」への対処法 [ビルマ・アンドラーヂ/吉田幸司]	15
エッセイ ブラジルの思い出 [田中克之]	16
ウーマン・アイ ブラジル人はおしゃべり好き [大塚未涼]	17
ジャーナリストの旅路 ブラジルのこと [小宮智可]	17
連載・文化評論 サンパウロ新聞の廃刊～73年に及ぶ歴史に幕 [岸和田仁]	18
最近のブラジル政治経済事情	19
新刊書紹介	20
連載・びっくり豆知識 ブラジルはスイスのようにはない	20
協会からのお知らせ	21



写真＝永武ひかる
「表紙のひとつ」
「北東部セアラ州カノア・ケブラーダの早朝、漁師が伝統的な帆かけ舟ジャンガダを引いていた。その向こうには何十機と風力タービンが並ぶ。一年中、強い風が吹く北東部は今ではブラジルの風力エネルギーを牽引する地域だ。」
(永武ひかる：ブラジル撮影約30年、著作に写真絵本「世界のともだち3 ブラジル」(偕成社)等。www.hikarunagatake.com)

トメアスー Tomé-Açu

わが国近代化の過程で、絹糸と労働力の米国への輸出は主要な外貨獲得手段であった。ところが、20 世紀初頭から日本人移民が徐々に締め出され、奴隷廃止で労働力の不足していたブラジルのコーヒー園へ仕向けられるようになった。こうして、サンパウロ周辺に日本人が急増した結果、現地社会の警戒を招いたため、移民を分散させる目的でアマゾン開拓が試みられた。

現地では、主要輸出品生ゴム採取源で森林に野生していたパラゴム樹の種子を、英国が東南アジアに持ち出しプランテーションを造成したことにより地域経済が低迷し、資本と移民の導入による農業開発を各国に呼び掛けていた。そこで当時、日本最大の売上を誇った鐘淵紡績(カネボウ)が南米拓殖株式会社を設立し、世界恐慌の始まった1929 年、カカオ生産を主目的とする日本人入植地をアカラ市トメアスー区に開設した。

太平洋戦争勃発による移住中断を挟んで、戦前戦後それぞれ2 千余名が日本から入植したが、交通不便な奥地に熱帯病が流行する中、農業経営を安定させる主作物もなかなか定まらず、多数が転出を余儀なくされた。戦前は陸稲や野菜で生計を立て、戦後1950 年代にコショウ黒ダイヤ景気に沸いてトメアスー市が誕生したが、フザリウム菌による立ち枯れが1960 年代から蔓延し、1970 年代以降、後作にカカオや被陰樹で経営多角化を図る遷移型アグロフォレストリ

ー (Sistema Agroflorestal de Tomé-Açu = SAFTA) の試みが続いている。一方、周期的コショウ高騰で利益を得た農家には、遠隔地に大規模なコショウ園を開くか、牧場やアブラヤシ園に投資、または起業する者もある。今日、1 千人余の日系人が農業等に従事し、文化農業振興協会 (ACTA) と総合農業協同組合 (CAMTA) に組織されている。トメアスーのカカオは入植地開設から90 年を経た昨年末、東京農工大学、カカオ栽培計画院 (CEPLAC)、零細小企業支援機関 (SEBRAE) の支援により、パラ州第一号となるブラジル政府産地認証 Indicação de Procedência “Tomé-Açu” para o Produto Cacau を取得した。



カカオ産地認証ラベル



トメアスーのアグロフォレストリ



山田祐彰 (東京農工大教授)

ブラジル赴任の前に ビジネスで使えるポルトガル語を



ブラジルでビジネスや生活をする上で欠かせないのがポルトガル語です。
BrAsia(ブレイジア)では赴任前と赴任後の語学研修を提供しています。
「講師任せにしない」 現地に精通したスタッフも学習をサポートします。

BrAsia(ブレイジア)の研修プログラム

■赴任前ブラジル・ポルトガル語短期語学研修

30～50時間

現地赴任前に
最低限の準備を!



独学の準備と
自己紹介・タクシー移動等

※企業への講師派遣(首都圏・名古屋地区・京阪神)も可能です。

■ブラジル異文化概論&マネジメント講座

半日～1日

ブラジルの文化・
ビジネスの課題を解決!



マネジメントや異文化理解等

■サンパウロ・ポルトアレグレ現地短期語学研修

1～6か月

キャンパスライフは不要!



マンツーマンで
語学力を一気に向上

BrAsia(ブレイジア)
代表者 小川善久



1987年大阪外国語大学(現・大阪大学)卒業。株式会社リクルートを経て2005年中国語の研修会社「漢和塾」を設立。2014年ポルトガル語の研修部門をBrAsia(ブレイジア)を設立。最低年1回ブラジル現地に出張しブラジルの今を体感中! またZENKYU(スティーゼン)として音楽活動も。日本のみならずブラジル現地で自作の曲を披露!
参考)YouTube: ZENKYU CHANNEL



BRASIL NOW

ブラジル・ナウ

高まる大学の起業家精神、新産業に期待

ラテンアメリカの大学ランキングでトップを争うブラジルの大学といえば、カンピーナス州立大学(UNICAMP)とサンパウロ大学(USP)である。いずれも経済力のあるサンパウロ州の名門だけあって、企業との連携や公的な研究支援が積極的に実施されていることで知られる。ここ数年、ブラジル経済が低迷するなか、大学の研究開発の現場もさぞ意気消沈しているだろうと思いきや、2018年9月に両校を訪ねた印象からすると、必ずしもそうではない。むしろ、新しいビジネスの芽をはぐくむ苗床に発展する可能性すら感じられた。

特許申請数、国内トップはUNICAMP

UNICAMPの科学技術パークは広大なキャンパスを見渡せる丘の上にある。ここにサムスンなどの国際企業や国内スタートアップ企業などが入居する研究棟が建っている。UNICAMPの産学協同の拠点であり、INOVA UNICAMP(イノバ)という学内の機関が管理している。イノバのニウトン・フラテシ所長は「重要なのは大企業とスタートアップ企業、研究者、学生が物理的に同じ場所にいることだ」と交流の意義を強調する。

イノバは大学と企業をつなぐとともに、大学が生んだ知的財産の権利を管理・保護する役割を果たしている。UNICAMPからブラジル産業財産庁への特許申請件数は2017年に企業を含むブラジルの全団体で首位だった(2016年は2位)。しかも、その数字は右肩上がりの傾向にある。イノベーション法制定の前年、2003年に設立され、産学連携の草分けとして長く活動してきたイノバの成果といえる。

USPも大学と産業界の結びつき強化に前向きだ。知り合いのジウソン・シュワルツ教授の研究室を訪ねると、数人の若者たちが作業中だった。同教授は国連からの資金援助で「社会的責任エンタテインメント」というジャンルのゲームづくりを進めている。犯罪や人種差別的の防止につながるゲームだ。彼のチームは学部生、院生、フリーランス、コンサルタントら20人で構成され、プログラミング、シナリオ執筆、動画制作といった仕事を分担している。制作したゲームを販路に乗せるため、ゲーム関係の企業と協議中だという。現在の交渉相手は国内企業だが、ゲーム大国・日本の企業も視野に入れている。

その研究室の近くにはINOVA USPという新しい学際的な研究イノベーションセンターが建設されている。ここではフランスのバスツール研究所との共同研究など、4つの中核事業が実施される。USPも特許申請件数ではブラジル有数の団体である。

企業と大学の利害が一致

シュワルツ教授は「この10～15年で産学をめぐる環境は大きく変わった」と話す。産学連携や科学技術・イノベーションを支援するための組織や資金供給スキームが整備された結果、「資金不足は問題になっていない」という。

景気低迷・財政難の折、本当に資金は足りているのだろうか。サンパウロ州最大の公的支援機関であるサンパウロ州研究支援財団(FAPESP)が2018年にまとめた年次報告書によると、州内での研究開発のための支出は2015～17年の3年間、ほぼ横ばいで推移している。確かに公的支援機関からの支出は減少傾向だが、大学、研究機関の支出はむしろ増勢にあり、民間企業の研究開発費も微減にとどまる。FAPESPからの支援も件数ベースでは2010年ごろから高水準で推移している。

サンパウロ州の大学や研究機関との共同研究にはブラジル国内企業だけでなく、マイクロソフトやシェル・グループといった多国籍企業も乗り出している。企業が狙うのは、研究開発費の分担によるコスト削減効果のほか、高等教育を受けたブラジル国内の人材確保である。共同研究にかかわった大学の人材を企業が採用する事例もみられるという。

このような企業側の思惑に大学側の利害が結びつく。共同研究をすれば、大学は業績を生み出すための研究資金や技術を手に入れられるうえ、学生らの教育・訓練にも役立つ。さらに、教員は特許料のほか、企業の人材育成・研修に協力することによる副収入が見込める。大学・教員に起業家精神が求められる時代に入ったといえる。

日本企業とはコミュニケーションの壁

ただ、日本企業との交流の壁は高いようだ。地理的な距離に加え、言語・文化の違いもある。さらに、「日本企業のブラジル現地法人は研究開発の決定権限をもっていないことが多く、コミュニケーションをとりにくい」との声も聞いた。

知的財産権の取得に熱心なUNICAMPが得た2017年の特許料などの収入は140万レアル弱(約4000万円)だった。決して大きな事業規模とはいえない。しかし、近年の景気低迷下でも研究開発の灯が消えるどころか確実に燃え続けていることは注目に値する。一次産品価格に左右されやすい経済構造、汚職を含む一連のブラジル・コストなど、ネガティブな材料が多いことは確かだが、少なくともサンパウロ州では、キャンパスをぶらつくだけでも未来への希望を感じることができるのである。

松野哲朗(経済ジャーナリスト)

BrAsia(ブレイジア) 運営:株式会社 漢和塾 〒104-0061 東京都中央区銀座1-14-12 楠本第17ビル5階
TEL: 03-6263-0716

お問い合わせは

E-mail: brasia@kanwajuku.com

HP: <http://brasia-j.com/>

ブラジル日系社会は 正直で誠実 Honestidade と Respeito 礼節と気づかい

思ってたのと違う現実

ブラジルの日系社会は、考えていたよりもずっと広範囲にそしてより深くブラジル社会に浸透している。日系社会がブラジルを形成する一要素であることはもはや明らかな事実なので、「浸透している」という表現はおかしいのだけれども、抗えない自然の同化という流れの中にあっても、やはり一線を画した存在感を示しているのも事実なのだ。2016年から2年半にわたってサンパウロ人文科学研究所が行った「多文化社会ブラジルにおける日系コミュニティの実態調査」の集計の中に、そんな結果を得ることができた。日系社会に属しているか否かを問わず、日系人の意識の底辺には、簡単に同化はしまいという意志のようなものが横たわっているようなのだ。

この調査は、ブラジルに存在するすべての「文化協会」系日系団体（各地の地域に根付いたコミュニティ活動として日系精神を貫きつつボランティアで運営する団体）を一軒一軒実際に訪ねてインタビューするという趣旨で行ったもので、それぞれの団体が現在どの程度の規模でどんな活動を行っているのか、地域にどんな影響をもたらしているのか、地域に親しまれているのか、日系としての意識が何なのかなどを事細かく聞き出したもので、その結果をデータバンク化し巨大な資料を作り上げることができた。

調査員として関わったのは、日系の一世から四世、2人の非日系人合わせた老若男女約18人。調査終了後すべての調査員が異口同音に語っているのが「知ったつもりだった日系社会が、実は全く知らない世界だった」という感動だった。どこへ行っても温かく受け入れてもらい「自分のルーツに改めて誇りを持っ

た」という予想外のおまけがついて目をウルウルさせた。多くの地域において、日系社会の貢献度や存在感が思っていた以上に大きかったという驚きにほかならない。

「考えていたより」とか「思っていた以上に」というのは主観的な感想でしかないが、日系団体に関する全体的な調査はかつて行われておらず、「……と言われている」と結ばれる伝説化されたまことしやかな話がほとんどだったので、これをもって多くのあいまいだった事柄がかなりはっきりしたと思う。

たとえば、日系人の信用の高さを称えるのに「Japonês garantidoと言われている」という伝説がある。かなり前から、実は称賛しているのではなく、日本人が自分の商品を売るのに下手なポルトガル語で「Garantido!, garantido!（品質保証付き!）」と連呼するのをブラジル人が揶揄したと訂正されており、実際そのような現場に居合わせたという日系人の話も聞いた。からかわれたことに気が付かなかったか何かの誤解から解釈が曲がってしまったのだと思う。いずれにしても今回の団体調査の傍ら街頭で聞き取りをした1328人の非日系ブラジル人の中に、日系人のイメージを「Japonês garantido」と答えた人はいなかったもので、少なくともこの件については、世間で「……と言われて」はいない。

違うけど残ってる現実

まず今回の調査で、活動を続けている日系団体が全国437カ所に存在していることが判明した。それらは様々な理由で自発的に生まれ、独自の進化を遂げているため、今では目的もマチマチであり、統一されたスタイルとして横並びに比べ

ることができない。また全国を統括する連合会のようなものも存在しない。それゆえこれらの団体を核とした各地日系社会をひとつの日系社会として扱うことはできない。

日系人は住居をあちこち移動する。新天地を求めての移住・再移住、開拓、出世、拡大、転職、転勤、子弟の学業のための引越、ブラジル経済に翻弄させられての大都市や日本での就労、海外転出等々。実にダイナミックに動いてきた。古いコロニア（集団移住地）から新しいコロニアへ、そこから今度はコロニアのない土地へ、その行く先々に協会を設立した。こうして日系人はブラジル中どこにでもいる存在となり各地で功績をあげてきたわけだが、この移動ゆえに日系社会の実態を把握しにくくしてきたともいえる。最初の移民から110年たった今、誰もが知りたい日系人口をわからなくしている要因のひとつだ。

少し横道にそれるが、日系人口がわからない最大の理由は日系人をどこまで日系人として数えるかを定義できないことにある。一世が非日系人と結婚して以後子孫がずっと非日系人と婚姻した場合、五世に残る日本人の血は計算上約6%。まず本人に日系人としての意識はないだろう。実際、サンパウロ州奥地で調査中に「俺はイタリア系だけど、曾祖父が日本人だったということをつい先日知った」と感涙もので語る、理論上四世の見た目完全な非日系人に会った。和食レストランを営んでいるという。ブラジル地理統計院の国勢調査では「黄色人種」には入っていないだろう。一方、日系人の少ないアマゾンで「文化協会」を守っている三世の会長がいる。この人は日本人の祖父からいえば、日本人の血が25%で、その子どもは12.5%の四世。



細川多美子
(サンパウロ人文科学研究所 常任理事)

いつも会館で遊んでいるので日系を意識していることは間違いない。これらのような場合に、「血」と「意識」のどこを基準にしたら日系と非日系の分岐点ができるのだろうか。

さて、日系一家の移転だが、その移動の波を地図上に書き込んだとしたら、ものすごいうねりになるはずだ。多くの団体が直面している会員の減少（会館の歴史の中でここ10年が最小人数と答えた団体は全体の約7割だった）から見るに、ここ30年は10年単位で人口分布図が大きく変化している。かなり流動的なうえに不況による資金難にもめげず、生き残った437の日系社会というべき団体は、55%が運動会、45%が敬老会を伝統行事として残している。そして一方、日本語学校の閉鎖が相次ぎ、日本語使用率が急低下している。ブラジルの地に骨を埋めたご先祖様にとってこれは、思い描いていた姿からは変わり果てたという失望だろうか、それとも変貌はしてもジッチャン・バッチャンの意志をついでくれたと感激になるのだろうか。

ブラジルにおける日系の“価値”

437の団体を「ひとつの日系社会として扱うことはできない」と書いたが、実は驚異的に全国的な共通事項があった。

「日系人の特徴、長所、次世代に伝えたい大事なことは何だと思いますか」の質問に対する答えだ。選択式でない自由回答なので様々なコメントが上がったが、圧倒的な意見が、①Honestidade＝まじめ、正直、誠実、②Respeito＝礼節、他者への配慮・気づかい・思いやり、人に迷惑をかけない、③Educação＝教育・しつけがある、④Tradição＝伝統文化がある、ときて、⑤協調性・団結力がある、勤勉、計画性がある、約束事を守る、信用できる、モラルがある、時間を守るなどが並んだ。

申し訳ないが爛れて乱れたブラジル社会の中でこそ際立つ性質として、北はトロピカル・アマゾンから南は雪降る山里まで、「親から習ったことは大事にした

い」と、守ってきた日本人性（日系性）だと言えるだろう。

これら日本人のまじめさについては、常々語られてきたことで目新しくはないが、意志をもって大切にしている点については、「世間の評判は裏切れない」と集団意識的でもあり、団体として習慣を伝えていることがよくわかる。比較的若い世代の日系人たちがこの特徴を“Valor＝価値”と呼んでいるのが印象的だった。彼らにとって「日系人として当たり前」の性質がすなわち「価値」であり、その内容が何なのかを具体的な言葉で聞き出すのは容易でなかった。またこれを常日頃からディスカッションしている若手のグループがあり、それがそのまま上記①～⑤なのだった。日系人が自分たちの日本人性をポルトガル語で語り合う時代というものをジッチャン・バッチャンたちは予測できただろうか。

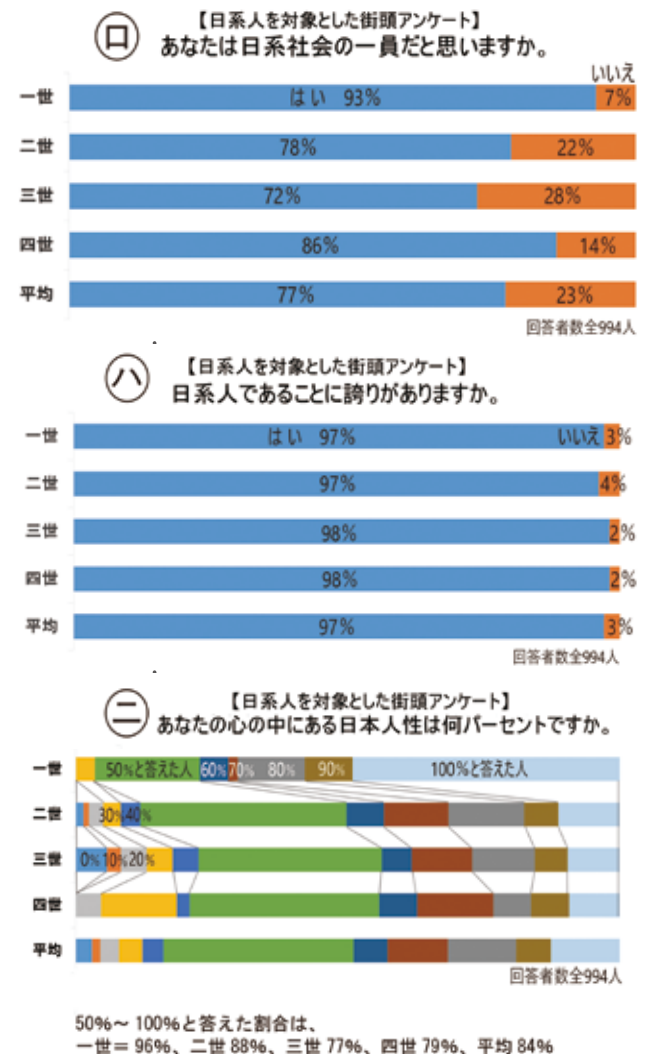
日系団体に所属している人たちが日系を意識するのは当たり前だが、これに所属しない多くの日系人たちはどのような意識を持っているのかが疑問だ。日系団体が存在する大多数の町で、所属していない人たちが多数派となっている。そこで赴いた調査地では、会館を出て街行く日系人に簡単なアンケートを試みた。突撃994人の回答を得た。

④日系人の特徴は何ですか。

まれに「非日系人と何も変わらない」と回答する人がいたくらいで、団体調査での結果とほぼ同じだった。

⑤あなたは日系社会の一員だと思いますか。（図表⑤）

団体に所属しているか否かにかかわら



ず、日系社会というもののへの帰属意識があるのかどうかを聞いてみた。

④あなたは日系人であることに誇りがありますか。（図表④）

凄まじい勢いで「はい」で、通例「とても」という強調語を伴った。

⑤あなたの心のなかにある日本人性は何パーセントですか。（図表⑥）

唐突な質問に困惑する人も多かったが、少し考える時間をとって本人の口から数字を答えてもらった。心の50%以上を日本人性が占めると答えた人が全体の84%にのぼる。すかさず100%と言い切る三世・四世がそれぞれ10%ほどいた。

ブラジル全土に拡散している日系社会は、これらの日系精神とも呼べる全国的共通事項によって目に見えないネットワークが複雑に構築されている。

サンタクルス病院 ～その歴史と新しい挑戦



柳澤智洋
(サンタクルス病院渉外担当責任者)

▼病院正面玄関



連邦政府介入～日系人経営の復帰から改革へ

第2次大戦中の1939年、ブラジルの様々な移民コミュニティに向けた「ナショナリズム」的な法律の影響で「同仁会」のブラジル化が決まり、名称も「サンタクルス慈善協会」へと変更された。そして1942年、日本とブラジルの外交関係が断絶されると、「同仁会」とサンタクルス病院は、ブラジル連邦政府の介入下に置かれてしまう。その後、日系人関係者の長年の努力により、90年代ようやく日系人の経営の復帰が果たされ、1990年、協会の名称は「日伯」が付された現在の「サンタクルス日伯慈善協会」となった。

2004年、日本政府による資金提供の下、広島の高岡（放射線被曝者医療国際協力推進協議会、1991年発足）と協定を結び、当時130人の日系人被爆者に対する治療ができるようになるなど日本との関係も密になっていった。

2012年、石川レナトが同協会の理事長に就任すると、サンタクルス病院は「日本との連携」への取組みを加速させた。例えば、病院内の案内にはポルトガル語

同仁会の設立

ブラジルへの初期移住者の健康問題を解決すべく建設されたサンタクルス病院の歴史は、ブラジルにおける日本人移住の歴史そのものと言っても過言ではない。781人のブラジルへの最初の移住者たちは1908年6月18日に笠戸丸でサントス港に到着した。初期移住者たちはコーヒー園の雇用農としてブラジル南東部（主としてサンパウロ州）に入植した者が多く、当時はさまざまな難難辛苦を耐えた。

移住初期の日本においては、ブラジルで起こる熱帯特有の病気はまったく知られていなかった。また、ブラジルの奥地に集中した移住地では病院が不足しており、医師の往診を受けるにも多額の費用がかかった他、言語文化の壁もあり、多くの移住者が命を落とすことになった。そこで、1926年10月9日、日本人移住者及びその子孫の健康改善活動のため、当病院の母体となるサンタクルス日伯慈善協会の前身である「同仁会」が日系社会初のブラジル政府認可の社団法人として設立された。そして、移住者たちが直面する病気や予防上の注意に関する指導用の冊子が定期的に発行されることになった。

サンタクルス病院落成

「同仁会」の計画は幅広く壮大で、健康・衛生に関する専門家の育成、内陸部への医師派遣、医療機器や医薬品の配布、啓発活動などの使命を担っており、その中にサンパウロ市内に新しい病院を建設するという大きな計画があった。そうして

1934年、皇室からの御下賜金をきっかけに、苦しい移住生活の中、すべての移住者が「一個のレンガ代でも」と、病院建設のための寄付を行い、日本政府と日本人社会が総力を挙げた結果、1939年（昭和天皇誕生日である）4月29日、「同仁会」設立後わずか10年足らずのスピードでサンタクルス病院が落成したのだった。当病院は「日本病院」と親しまれ、当時ブラジルにおける唯一の日本人団体の施設だった。

開院後、外務省の嘱託医として派遣された慶應義塾大学医学部出身の医師細江静男などをはじめとする日本人医師とブラジル人医師とがうまく一体化し、ブラジルで最高峰とされるサンパウロ大学医学部長のベネジット・モンテネグロ教授を院長に迎えたことは、当病院が、日本移民のための病院であると同時にサンパウロ市民にも広く開かれた、まさに2国間の懸け橋となる団体になった証と言える。また、ブラジルの心臓移植手術の第一人者であった医師ゼルビーニや、サンパウロ・癌センター（A.C. カマルゴ）創設者の医師アントニオ・プルデンテなどが勤務していたことから、当時サンタクルス病院は名実ともに南米における最も先進的な病院のひとつであったことを如実に物語っている。さらに、ブラジルで初のレントゲン機材を取り入れるなど、ブラジル医学最高レベルの外科手術技術を誇り、日系社会のみならずブラジルの医療や福祉に大きく貢献してきた。

◀国内でも高く評価されている集中治療室入口

に加え日本語表記を追加し、JICAボランティアの栄養士や日本語教師の受入れによる入院食の和食の質の向上や医療従事者への日本語対応力強化を行うことで、在留邦人、日系人のための環境整備を行った。

ブラジルにおいて初めて病院に「トヨタ生産方式」を導入し、医療提供の効率化やサービスの向上を図るための改革も進めた。導入の結果、外来患者の待ち時間の平均30分間の短縮や投薬用キットの組み上げに要していた時間を22%削減する等、病院診療の患者本位の合理化、生産性・効率性が向上した。また、ブラジルに進出している日本の医療機器メーカーとの関係構築も行い、日本製の医療機器を積極的に導入しながら、実際機器を使用している医師がその製品の長所や利便性を外部の医療従事者に紹介するなど、当病院を日本製医療機器のショールームとするための取り組みにも本格的に着手した。

2014年の安倍総理大臣夫人、2015年の秋篠宮同妃両殿下などの日本国要人の御訪問があり、2016年のリオデジャネイロ五輪が開催された際は、日本語を話すことができる医師及び看護師を同市へ派遣し、20名近くの邦人患者の対応（うち手術2件）にあたり、観戦のためにブラジルを訪問した日本人応援団に対しても医療支援を行った。

日本との積極的な医学交流

医学分野の学術交流も積極的に実施している。2015年、日伯外交120周年記念事業となった医療セミナーにおいて、医療分野における日伯の協力関係強化を提唱して以来、筑波大学、大阪大学、九州大学等との交流を進め、サンタクルス病院に日本とブラジルの大学教授を招いて医療シンポジウムを開催するなど、人的交流にも力を入れてきた。そして現在、上記の大学との共同プロジェクトの芽が出始めている。

筑波大学との共同プロジェクトでは、2019年より、当病院の若手医師を科学技術振興機構（JST）の「さくらサイエンスプラン」助成プログラムにより、同大学付属病院の陽子線治療に関連した分

野の研究・研修に3週間派遣することになった。このプログラムは今後3年間続き、毎年3名、合計9名の医師を同大付属病院に派遣することになる。癌治療の陽子線治療センターは、日本には数多く存在するが、南半球には1か所のみで南米大陸には一つも存在しない。研究・研修から戻った医師たちが、陽子線治療がブラジル人がん患者のための最善の治療法だと判断すれば、日本の病院で治療を行うなど医療ツーリズムに繋がり、さらにブラジルへの導入に発展することも考えられる。

大阪大学は、今世界で最も注目されている研究分野のひとつである双子研究を行うツインリサーチセンターが日本で初めて設立されたことでも知られる。双子研究とは、同じ遺伝背景をもつ人々を調べることで病気の原因に環境因子がどのような影響を与えるかを明らかにする研究である。一方、ブラジルに190万人在住するとされる日系ブラジル人は、日本人と同様の遺伝子を持ちながら、環境の全く違う場所で生活しているの、おそらく日本に住む日本人とは違った病気や身体の状態（腸内フローラなど）があるだろうと予想される。我々はこの点に着目し、双子研究ほど研究の確度は高くないものの、それでも環境因子を分析できる日系ブラジル人研究を同大学ツインリサーチセンターと共同でできないかと協議している。将来日系ブラジル人研究が、世界で起きているいくつかの病気の原因特定に寄与することになるかもしれない。

九州大学との共同プロジェクトのように、JICAからの支援と共に進めているプロジェクトもある。2018年、JICAの呼びかけで日系病院連携協議会が開催され、ブラジルの6つの日系病院（サンパウロ州のサンタクルス病院、日伯友好病院、ノーボアチバイア病院、パラ州のアマゾニア病院、パラナ州の杉沢病院、パラナ病院）が今後共同でプロジェ



▲開院80周年記念ロゴマーク

クトを実施する指針が示された。当病院は、九州大学と温めていた「当地の食材を使い、味や色彩、栄養にも優れた健康寿命の増進のための「本当の和食」をブラジルで普及

させるための共同プロジェクト」を他の日系病院と合同で取り組む提案をした。

現在上記の各日系病院の栄養士6名は、「本当の和食」の味を知る機会や、治療の一環として提供される日本の病院食の考え方を学ぶため、JICAの2019年度日系研修員受入事業（於：九州大学）に応募をしている。研修が実現すれば、栄養士たちは「本当の和食」を調理する上で必要不可欠な技術、食材の選別、調理器具の使い方などに習熟することのほかに、日本の食文化の背景なども肌で感じてもらい、研修を終えブラジルに戻った後、日本の九州大学とブラジルの日系6病院とを遠隔通信で結んだ継続的な活動の展開が期待される。

以上、サンタクルス病院の歴史と今後の活動について述べてきたが、2019年は当病院開院80周年の節目の年となる。昨年は学術交流強化及び研究体制強化のため、サンタクルス学術研究所（IPESC：INSTITUTO DE PESQUISA E ENSINO SANTA CRUZ）が発足した。サンタクルス病院及び同研究所は、今後ますます日本政府、日系企業及び日本の大学との連携を強化し、共同研究やプロジェクトを積極的に展開していく方針である。

なお、本拙稿の執筆にあたり、モニカ・ムサッチ・シトリノウィッツ、ロネイ・シトリノウィッツ著、二宮正人（当協会副理事長）ほか訳『サンタクルス病院の歴史』（2017）、ならびに西国幸四郎脳外科医（当協会理事、当病院脳外科部門長）の第2回、第3回「国際臨床医学会」講演「ブラジルにおける日本人移住の歴史とサンタクルス病院」（東京、2017.12.2）、「サンタクルス病院における日伯共同研究及び協力プロジェクト」（東京大学、2018.12.8）の内容を参考にした。

『ブラジル日系人経営者50人の素顔』 下巻編発行の目的と意義について



菅野英明
(カンノエージェンシー代表)

サンパウロ新聞社とカンノエージェンシーがタイアップした『ブラジル日系人経営者 50 人の素顔』下巻編が、ブラジル日本移民110周年の記念書籍としてサンパウロ新聞社から2月末に発行される。上巻同様に日本語とポルトガル語の二か国語併記で、3年前の上巻に続き二部作として合計100人の経営者を掲載している。日系人経営者の取材を通して、世界最大の親日国・ブラジルの存在力を日本人や日本にどう分かってもらえるか、同時にブラジル国民とブラジル日系人に対してブラジルの日系人経営者の存在力をどう高めていくか、これがこの書籍化目的の1つであり、その方策が「日系人経営者」の発行だった。大部分が経営の最前線に立ち、ブラジル全土で日系コロニア諸団体の運営活動や財政的支援の面でも大きな役割を担い、同時にブラジル社会や地域の発展に大きく貢献している。

こうした経営者というカテゴリ・ジャンルが従来の日本移民史の歴史と記録から抜けていたと思われるが、この連載を書籍化して『日系人経営者』という分類で、移民の歴史に新たに加わり、日伯間の橋渡しの一助に貢献することが私の使命と思っている。この点で書籍発行元のサンパウロ新聞社と考えが一致しタイアップとなった理由だった。上巻がサンパウロ州内の経営者にほぼ集中していたのに比べて、今回はブラジル10州と取材範囲を広げた。日系人経営者と会社経営をテーマに、どのような事業を行っているか、会社の特徴と経営方針、経営の現状と今後の事業展開、経営者とし

ての生き方考え方、本人と家族の移住史、親からの教えとその精神文化の継承、家族愛、地域性と地域密着、日系社会及び日本との係わり、ブラジル及び日本に対する見方考え方、などを、限られた記事スペースの中で多面的かつ総合的に取材した。

この日系人経営者の書籍化に取り組んだ第1歩は、2013年からで上下巻あわせて5年以上かかったことになるが、今回は2年半かけて48人の日系人経営者（ほか2人は在日日系人経営者）を取材した。取材先1つ行くにもサンパウロから500キロ、1000キロといった距離はブラジルでは日常感覚だ。しかも今回の取材は1人1人手探り状態から取材をしてきた。これが2年半かかった最大の理由だった。この間、各地域で取材情報を提供してくれた多くの協力者がいたおかげでこの仕事が全うできたことに感謝したい。またこの5年間の取材期間中は、14年にサッカーW杯、16年にリオ・オリンピックがあったが、時を同じくするようにブラジル経済は最盛期から最悪期に一気に下降した時期と重なった。しかしブラジル経済を見れば分かるが「農業と天然資源、内需と輸出という4輪駆動型の経済構造を持つブラジルは世界の大国の中でも本当に強い国だと思っている。ブラジルは浮き足立って一喜一憂する国ではない、腰を据えて中長期的な視点で戦略的に取り組む国」だと、30年超のブラジルとの出会いと縁を通して確信している。

ブラジルに移住した1世と2世、そして3世と4世の1部を中心に、『勤勉』『誠実』『努力』『信用』『責任』

『向上心』『忍耐』『規律』『秩序』など、親代々から受け継がれてきた日本の伝統的な精神文化の土着化は、ブラジル総人口の僅か約1% (190万人) の日系人と日本人の継続的な努力によりブラジルからの信用に繋がった。いまの日本と日本人にとってはこれが最大級の国家的かつ国民的なソフト資産に繋がっている。ここブラジルでは昨年6月に日本移民110周年を迎えたが、日本移民によってもたらされた日本の伝統的な良き精神文化は、ブラジルの文化風土と重なりながら社会で受け入れられて、ブラジルの社会発展に大きく貢献している時代に入っている。日系人と日本人のもつ良き伝統的な精神文化の浸透と拡大が、ブラジル社会でいま最も必要とされていることではないか、とも思っている。

多民族国家で多様性をもつアミーゴの国であり寛大な世界の大国・ブラジルは、民主と自由が保証され、調和と進歩をバックボーンにした自由主義国であり、4年後の2022年には建国200年を迎える。

最後に本書刊行に際して、5年間タイアップで協業した鈴木雅夫サンパウロ新聞社長、取材した経営者の方々、取材協力をしていただいた多くの皆様、そしてアミーゴ精神で思いやりに溢れたブラジル国民と温かく迎え入れてくれたブラジルに心から感謝の念を捧げたい。ブラジルと日本のさらなる関係強化と未来永劫の発展を願って「ピバ、乾杯、サウージ」。

駐日ブラジル大使より 着任のご挨拶



エドゥアルド・パエス・サボイア
(駐日ブラジル全権大使)

この度駐日大使に任ぜられた私より『ブラジル特報』読者の皆様に初めてご挨拶申し上げます。この機会をいただき、大変光栄に思うが、私の在任中にブラジル大使館と日本ブラジル中央協会との間の紐帯が一層深まることを期待している。

日本にとってもブラジルにとっても、また我々の相互関係にとっても極めて重要な時期にブラジル大使館のトップという重責を担うこととなった。

サミット会議 G20 の開催、新しい天皇陛下のご即位、2020 年オリンピックパラリンピックへの最終準備など、今年は政府にとっても日本社会にとっても重要な行事が目白押しであり、この点においても日本は国際社会におけるリーダーシップを発揮する年になる。

ボルソナーロ新政権

一方、ブラジルについては、就任したばかりのボルソナーロ大統領と有能な関係スタッフがブラジル経済の成長と生産性の向上を目指して諸改革を実行すると公約していることもあって、投資家ばかりでなくブラジル人全般に勇気と希望をもたらしている。

ダボス会議に参加したボルソナーロ大統領は安倍晋三総理大臣と首脳会談を行ったが、政権として改革を実行すると重ねて表明している。その諸改革とは、確固たる信念をもって汚職を撲滅し、治安を回復し、財政を安定させ、税制を合理化し、市場を開放して、大きな政府から小さな政府へ改革するというものだ。

通商関係・経済関係について

通商関係については、ブラジルはメルコスール加盟国とともに EU 並びにカナダとの FTA (自由貿易協定) 交渉を進めており、昨年には、シンガポールや韓国との FTA 交渉も開始している。一方、日本は、既にメキシコとの EPA (経済提携協定)、TPP (環太平洋パートナーシップ協定)、EU との EPA などの経済提携協定を結んでいる。こうした両国間の政治的、経済的な絆はもとより、両国間の人的交流関係は 100 年以上の歴史を有しているのであるからこそ、私の役割は両国に互恵的な合意を確立することの重要性を言い続けることだろう。

CNI (全国工業連盟) と経団連は共同でこうした経済提携の具体化に向け様々な貢献をしてきたが、私もこの二団体と協働で、今年中に、より踏み込んだ内容を提言したいと考えている。

ブラジルの企業関係者も農畜生産者も、日本市場への更なる進出を希望している。と同時に、ブラジル市場は日本経済にとっても大きな可能性を有している。例えば、現在使われている携帯電話の機器数では、ブラジル市場はフランス、英国やイタリアの二倍以上であり、自動車販売市場としては世界のトップテンに入っている。他の分野でも、ブラジル市場の有力さを物語る数値に事欠かない。PwC の調査によれば、2050 年にはブラジルの経済規模は世界で現在の 7 位から 5 位になるとみられている。(ちなみに、この予想では 1 位中国、2 位米国、3 位インド、4 位インドネシア、となっている。)

我が国は成長を続け、世界に向けてさらに門戸を開いていくが、日本のようなブラジルにおいて既にパートナーとして確立している国の企業がブラジル市場へ進出する場合、もしドイツやフランスあるいはカナダ、韓国といった国の進出企業よりも不利な条件となってしまうと、日本企業にとっては進出する意味がないことになってしまう。

経済パートナーシップ協定を目指して

メルコスールと日本の間の経済提携協定の対象となるものは主に農業や畜産の分野であるが、この部門は、我が国の経済の重要な基幹要素でありブラジルが誇りに思っているものである。

我々の競争相手はそうではないと信じさせようとしているが、我が国の農畜産品が日本市場に入っても日本の農畜産品には影響を及ぼさないのだ。というのも国産品の市場と棲み分けが出来ているからだ。我が国には世界最大の日系コミュニティがあり、さらには様々な日本産品がブラジルにおいて好評を博していることから、すべてのブラジル人にとって日本産品が日々の生活の一部になっている、というファクトは繰り返すまでもない。

更なる関係強化へ

経済的パートナーシップに加えて、私としては、ブラジルと日本双方に互恵的と思われる他の分野、すなわち、科学や技術、教育、さらには防衛や安全保障の分野における提携関係を展開できるように私なりの努力を重ねたいと考えている。現在進行中のプロジェクトを完結し、新しい企画を立ち上げ、日伯二国間の紐帯をさらに一層強化していく時期が、私の任期に重なるものと考えている。今後とも日本ブラジル中央協会の皆様には引き続きご支援のほどよろしくお願いしたい。

期待を担った ボルソナード政権の発進



永井 忍
(元週刊 Faxnews 発行人)

ブラジルでは今、今年元旦に発足したボルソナード政権の一挙手一投足に関心が集まる。というのも深刻な財政危機が進む中、選挙運動を通じて、まとまった形、文書として発表された政権構想や政治経済路線、その論争は何もなかった。何もかも未知のまま政権が発足した。

既成かつ主要な政党とは一線を画して、米国のトランプ大統領のようにソーシャルネットで社会の不満を取り込んで支持を広げた。汚職と腐敗に染まって、財政危機も治安悪化も改善できない体制を非難し、PT を破れる極右の候補者として地位を確立した。全般に保守的でも極左も極右も避けてきたブラジル国民だが、完全に二分した 2018 年大統領選では極右と見なされるボルソナード候補を選択した。

ブラジル近代史は、約三十年の周期で体制が変わってきたことを明らかにする。前の周期は 1990 年発足コロール政権とともに始まった。ボルソナード政権発足に至った選挙戦と結果は、新しい周期に移行するとの分析を許容する要素を備える。

閣僚人事後に行なわれた世論調査で、65%はボルソナード新大統領とそのチームが正しい道を歩んでいると答えた。治安と汚職、失業の各分野で改善を見込んでいる。大統領選で候補に支持も選択もしなかった人々、すなわち対抗の PT 候補に投票したか白紙投票した人々の一部がボルソナード支持に回ったことを示す。

就任式当日、選挙運動中に刺傷を負っただけでなく脅迫電話も受けていたため、過去のどの大統領も上回る厳重な警戒体制の下、土壇場まで公表されなかったオープンカーに乗って、推定 11.5 万人の国民を前にパレードした。その数はルーラ大統領に及ばないものの、熱狂的な支持者の存在は同じだった。

就任演説で、経済を脇において、重大な刺傷を生き延びられた事実と感謝、そして権力の座から引き摺り下ろした政敵に対する非難とイデオロギー闘争を強調した。だが貧困者や格差是正に言及しなかった。就任式最大の驚きは、プラナルト宮演説台での大統領演説で起きた。大統領夫人が大統領の前に手話で演説したことだった。身体障害者支援の増強を表明したが、やはり差別されている

女性や人種に関する言及はなかった。

就任第 1 週に経済案件に関する新大統領発言は、年金改革を含めて、直後に矯正が必要になることの連続だった。そのような失態や閣内での不調和音は徐々に是正されたが、予定外の勝利で、政権運営の組織も人材も欠ける実態を明らかにした。それは大幅な行政組織改造も加わって、インディオ保護機関 Funai の管轄と役員人事をめぐる混乱にも現れた。公約の汚職撲滅にしても、その膝元から疑惑の煙がすでに上がっている。外務省直属機関 Apex（輸出投資振興庁）長官更迭劇で、新大統領が選挙戦で非難した旧態の政党政治の一角を覗かした。

ブラジル第一主義を掲げる新政権の下、外交は教育や慣習とともに最もイデオロギー闘争の対象になる分野であり、米国寄りを鮮明に打ち出すなど、PT 政権の路線と姿勢を全て否定するものに移行を明確に打ち出した。ベネズエラとキューバの大統領にボルソナード大統領就任式への外務省招待を取り消すに至ったし、ニカラグアをそのリストに追加した。他方、イスラエルの首都をエルサレムと認知し、大使館の移転は時間の問題と就任式にわざわざやってきた同国首相に表明した。

そして選挙中に公約した銃器規制や環境保護規則の緩和に着手した。さらに社会保障制度は暫定令を通じて、不正を撲滅し、効率を向上する改正を着手した。抜本的なものは改憲が必要であり、新国会での成立に向けて工作を進める。

なお発足後、1 月 18 日現在、サンパウロ証券取引所の株価指数 Ibovespa は 9.3%上昇し、貿易ドルは R \$ 3.758 に 3.0%下落した。株価が上昇しても、新大統領とその路線を信じる、期待する外国投資家が資金を持ち込んだからではなく、逆に昨年 10 月より一貫して持ち出しているが、国内の投資家がいちいち支えている結果だ。金融市場は、これまで森林保護、インディオ保護などの改悪リスクに目をつむって、経済自由化と財政健全化の前進の可能性に期待を膨らませようだ。

そのように楽観と期待が金融市場に特徴的にあふれる国内でも、PT 候補者に投票した人々だけでなく、反 PT を理由にいやいやボルソナード候補に投票した人々も、今なお不安と疑問とともに新政権の動向と措置に懐疑の目を向けている。これだけは PT と同じで関係が陰険である、メディアの目も厳しい。決して長くないと観測される蜜月中に、国民に痛みを強いる年金改革を初め、一連の必要な改革を国会で勝ち取って、公約した経済安定成長と治安改善に向けてどこまで前進できるか。新しい政治体制を確立できるか。2 月とともに新国会が開設されて、いよいよ本番だ。

KIKKOMAN ブラジル市場への挑戦



秋元壮介
(KIKKOMAN ブラジル代表)

KIKKOMAN の世界展開とブラジル

「しょうゆ」には世界に通用するおいしさがある。という確信のもと、KIKKOMAN は海外における展開を進めてきた。KIKKOMAN しょうゆは現在、世界 100 力国以上で愛用され、日本に 3 力所、海外に 7 力所の生産拠点をもつに至っている。1950 年代の本格的なアメリカ進出に始まった当社の国際化は、70 年代にはヨーロッパ、80 年代にはアジアと、現在に至るまで展開地域を拡大してきた。当初に進出したアメリカでは、今や多くの家庭にしょうゆが常備され、「KIKKOMAN」は「Soy Sauce」の代名詞となっている。一方、ブラジルにおいては、最大都市サンパウロにマーケティング機能としての事業所を持ち、現在、輸入代理店を通じて、世界各国の工場で製造された商品を輸入・販売している。

ブラジルでの KIKKOMAN の歴史

当社の南米大国「ブラジル」への思い入れは強く、既に 30 年を超える歴史がある。1970 年代後半より市場調査を開始し、80 年には現地マーケティング会社を設立した。80 年代から 1990 年代には、一部現地でモノづくりを行った時期もある。2000 年初頭に「日本食ブーム」の波が到来し、現地日系しょうゆメーカーが大きく拡大・発展する中、当社は「世界各国にある工場からバリエーション豊かな商品を輸入できる」という強みを生かし、輸入品を通じた販売を強化してきた。今では「しょうゆ」に限らず、「つゆ」や「たれ」、「テリヤキソース」「ぼんず」といったしょうゆ周辺調味料、「オイスターソース」「オレンジソース」などの中華系調味料まで、バリエーション豊かに商品を拡充してきており、大変好評をいただいている。

ブラジルで「KIKKOMAN しょうゆ」を普及すること

世界最大規模の日系社会を有するブラジルにおいては、多くの日系移民の方々の故郷の味への“想い”から「Shoyu」という言葉への馴染み・理解は大変深い。ブラジルにおけるしょうゆ醸造業は 1900 年代前半に既に始まっており、その後も連綿と続き、現在でも日系しょうゆメーカーが多く存在する。日系しょうゆは、本醸造濃口しょうゆの主要原料である「大豆」「小麦」のうちの「小麦」が、ブラジルにおいては入手困難であったことから、その代用として「トウモロコシ」が使われている。一般的に味は甘めで、日本のしょうゆよりも色が黒い。日本産のしょうゆが輸入・紹介される以前

に、この日系しょうゆが長らく「ブラジル Shoyu」として広がり定着してきた。このため、「澄んだ鮮やかな色」をその特徴とする当社の製品とは、“色”という点で大きな違いがある。

こういった「特徴」としての違いに加え、価格面でも大きな差がある。為替の変動、輸入・通関コスト、さらには複雑なブラジル税制等が影響し、店頭価格が著しく高い現状が続いている。店頭におけるブラジル国内産しょうゆとの価格差は実に約 3～4 倍となっており、同じ「Shoyu」というカテゴリーで並んだ場合、当社品を手にとりいただくことの難しさの要因の一つとなっていることは否めない。

新たな挑戦

こうした中、「現地の嗜好に合った商品づくり」を目指し、現地において商品開発をするという、新たな試みにも挑戦している。ブラジルの方々の嗜好やライフスタイルに合わせ、従来の商品では提供できない味わいや価値をもつ商品の開発を進めている。今後も、輸入品を引き続きご提供しながら、新たな顧客層を獲得すべく、現地開発商品の拡充も行っていく予定だ。



「Festival do Japão 2018」当社ブース

おいしい記憶をつくりたい。

KIKKOMAN は、「素材を選ばず独特の香りやうまみを与え、さまざまな料理になじむ」という当社しょうゆの特徴を活かして、現地の食文化との融合を図りながら世界にしょうゆを普及させてきた。これからも、現地の暮らしや食文化に寄り添いながら、しょうゆの持つ様々な魅力や可能性をお伝えしていきたい。今後も、日本を始めとした様々な輸入品をご提供しながら、新しい美味しさとの出会いを創造していくことに挑戦するとともに、ブラジルの地においても、モノづくりも進めていく。ブラジルをおいしい笑顔で満たすため、新たな挑戦を続けていく。



総合週刊誌 VEJA(2019 年 1 月 16 日号)
表紙のタイトル：政権初日からゴタゴタ

「ハラスメント」の実務



柏 健吾
(TMI 総合法律事務所
日本法弁護士、
現在ブラジルで勤務)

連載

ビジネス
法務の肝

1. セクハラ・モラハラへの関心の高まり

近年、セクシャルハラスメント（以下「セクハラ」）やモラルハラスメント（以下「モラハラ」）への関心は世界的に非常に高まっている。特に、セクハラについては、ツイッターに過去のセクハラ被害を告発する #MeToo 運動が世界中で拡大するなど、これまで以上に人々の注目を集めている。このような世界的な関心を受け、国連の国際労働機関（International Labour Organization）も、職場でのセクハラやモラハラを防止するための条約を 2019 年にも制定する方針を決めている。

2. ブラジルの状況

2015 年に Vagas.com がブラジルにおいて行った調査によれば、職場において、何らかのハラスメントを受けたことがあると回答した人が男女合計で 52% であった。ハラスメントの告発を受け付けている労働公共省（Ministério Público do Trabalho）は、ハラスメントを防止するキャンペーンをこれまで多く実施しており、被害者からの被害申告の数も年々増加している。同省は、2017 年には、300 件を超える女性からのセクハラ被害の申告を受けつけたようである。

3. なぜセクハラ・モラハラに 気を付けなければならないのか

ブラジルは訴訟大国である。労働法改正により労働訴訟の数は大きく減少したものの、それでも毎月平均して 3 万件近くの慰謝料請求が含まれる新規労働訴訟が提起されている。労働訴訟において、セクハラ又はモラハラは、損害賠償請求を主張される最も多い原因の一つである。

仮にセクハラ・モラハラと認定されると、加害者及び会社が損害賠償義務を負うだけでなく、事案によってはその内容がメディアによって公表される可能性もある。その場合、会社のイメージが大きく毀損することになる。

4. ブラジルにおけるセクハラ・モラハラの定義

日本では、セクハラ、パワハラ、マタハラ、アルハラなど多様な言葉でハラスメントが議論されているが、ブラジルでは、大きく分けて、セクハラ (assédio sexual) とモラハラ (assédio moral) の 2 つに分けて議論されている。

セクハラ・モラハラは、労働訴訟の場面で最も問題になるが、いずれの用語も、労働法にはその定義はない。ブラジル刑法では、セクハラは犯罪として位置付けられており、セクハラを、「性的な欲求を満たす意図で、自らの有利な立場を利用して、他者に嫌がらせをすること」と定義している。労働訴訟の

場面では、かかる刑法の要件より緩やかに捉えられており、例えば、立場が同じ（単なる同僚）でもセクハラは成立する。一方、モラハラは、一般的には、「職場において、労働者に対して、継続的かつ長期的に、精神的苦痛を与える行為」と定義されている。

セクハラ・モラハラ問題の対処を難しくさせている要因の一つは、その判断基準が明確でないことである。加害者・被害者の関係、当該言動を行った背景、文化の違い、一般常識の変化等によって、同じ行為でもハラスメントになったりならなかったりする。数十年前に当たり前のように行われていたことが現在ではセクハラになり得るし、ブラジルで日本と同様の方法で部下に接するとモラハラになり得る。したがって、どのような行為がハラスメントに該当するのかを明確に線引きすることは難しい。そこで、重要となるのは、自らの行為がハラスメントに該当する可能性があることを常に念頭に置いておくことである。以下では、どのような言動がハラスメントになり得るかの参考として、ブラジルで実際に問題になった事例をいくつか紹介する。なお、以下の事例も、以下で記載した言動のみでハラスメントと認定されたわけではなく、それ以外の事情（例えば、侮辱した発言を繰り返していたなど）も考慮されていることは留意されたい。

5. ハラスメントと認定された事例

(1) 不思議の国のアリス

部署のマネージャーが、部署内のメンバーとの間で、あるメンバーに関して、「彼はゲイのようだ。夜は不思議の国のアリスに行っているに違いない」と言ったこと。

(2) 亀の人形

営業成績が最下位の従業員の机に亀の人形を置いたこと。

(3) 動物の名前で呼ぶ

「お前は猿か」、「お前は馬か」などと従業員を罵ったこと。

(4) 娼婦とのパーティー

営業マンの士気を高めるため、朝の会議に娼婦を呼んだり、娼婦を呼んだパーティーに従業員を参加させたこと。

(5) 営業目標達成のためのプレッシャー

営業目標達成のプレッシャーをかけるために、昼食時、夜中、週末問わず、1 日何十回もメールを送ったこと。

(6) トイレ利用の制限

トイレに行く回数や時間を制限したり、トイレに行くことを許可制にしたこと。

(7) 窓際族

仕事を与えない、サーバーへのアクセス権を取り上げる、長期間自宅待機させるなどの行為。

(8) お尻を燃やす権利

営業成績を達成した従業員へのプレゼントとして、ほかの従業員のお尻をライターで燃やす権利を付与したこと。

「BLOCK K」への対処法



ビルマ・アンドラージ
(KPMG サンパウロ事務所
タックス・パートナー)



吉田幸司
(KPMG サンパウロ事務所
パートナー)

2019 年がボルソナロ新政権のもとスタートしたが、ブラジルは、年金改革、税制改革など解決すべき多くの課題を抱えている。その中に「税務手続きの効率化」もあり、ブラジル税務当局は産業の製造チェーンに関するデータを含む様々なデータのより効率的な分析を可能とする試みを行っている。その 1 つに、最近よく耳にする“BLOCK K”と呼ばれるものがある。今回はこの“BLOCK K”について説明したい。

BLOCK K の概要

BLOCK K とは、製造と在庫の移動に関する情報を毎月（翌月の 10 日から 25 日まで）ブラジル税務当局にデータで提出するもので、本誌の「連載★税務の勘どころ」（2018 年 11 月号）で紹介した SPED（公的電子帳簿システム）の 1 つである。

この BLOCK K に対応するためにブラジル企業はテクノロジーへの投資が必要となっている。例えば、エラーを回避するためのロボット・プロセス・オートメーション、リスクを特定するためのデータアナリティクス、不要パターンをマッピングするための機械学習、また、リアルタイムデータ送信のための IoT などがある。BLOCK K は当初予定から遅延しているものの、以下の通りに順次適用が開始されている。

会社規模	適用時期	産業	提出データ
年間売上が 3 億レアル以上	2017 年 1 月～	製造業者 (CNAE 10-32)	K200(*1) 及び K280(*2) のみ
	2019 年 1 月～	飲料、タバコ、自動車、 トラック等の製造業者	全データ
	2020 年 1 月～	機械、電子部品およびそ の他の輸送機器の製造業 者	全データ
	2021 年 1 月～	非金属鉱物製品、自動 車パーツ等の製造業者	全データ
	2022 年 1 月～	上記以外の製造業者	全データ
年間売上が 7 千 8 百万レアル以上	2018 年 1 月～	製造業者 (CNAE 10-32)	K200 及び K280 のみ
上記金額未満	2019 年 1 月～	製造業者 (CNAE 10-32) 及び卸売業者 (Group 462-469)	K200 及び K280 のみ

(*1) K200: 在庫残高データ (*2) K280: 在庫残高データの修正

上記表のとおり売上高が 3 億レアル以上の会社は 2019 年 1 月からその産業に応じて順次全データの提出が求められており、これは非常にチャレンジングなものである。この全データは既に月次で提出している在庫残高データ (K200 及び K280) に加えて、原材料の購入、投入品の消費量、第 3 者による製造といった非常に詳細なデータが含まれる。税務当局がこれらのデータを取得することで在庫及び製造サイクルに関する情報をレビューすることが可能となる。2019 年 1 月から適用開始となっているが、まだこの情報を作成するための準備を進めている会社もある。また、新たなデジタルフォーマット情報の適正性、製造オペレーションを記録するためのプロセ

ス・内部統制の変更の必要性、様々な部署間でのコミュニケーション、さらに、ブラジル企業の税務リスク増加を避けるべく正確な情報を生成するといった多くの課題もある。

Registro 0210 (標準消費量情報)

提出情報うち、最も物議を醸しているのが Registro 0210(標準消費量情報)である。これは、部品表 (BOM: Bill of Material)、テクニカルデータシート、テクニカルリスト等を含む管理システムとして知られているものであり、また、製品アイテムの単位ごとに製造に必要な構成要素とその投入量を明示化するものでもある。

このような情報を提出することは、産業情報の機密性を害するのではないかと多くの納税者は異議を唱えており、これが論点の中で主要議題となっている。一方でブラジル税務当局は、SPED で提出される情報は、税務上の守秘義務により保護されているため、産業情報の機密性は害していないという立場をとっている。

また、この“Registro 0210”により製造への投入品ごとの予測損失情報も提出することになる。この情報は、ブラジル税務当局が購入した投入品と製造された製品を追跡することを可能とするものであり、当局が実施する可能性のある情報照合で情報間の矛盾が生じないようにする必要がある。実際には“0210”で提出される情報は、“消費された投入量と発生した損失”は“生産された数量”と整合しなければならない。

BLOCK K への対応

BLOCK K により提出される情報は、ブラジル税務当局が情報を検証、照合データ分析を行い、脱税のケースを特定し、税金が正しく支払われていることを確認するために非常に重要なものとなる。BLOCK K に対応しなければならない会社にとって、最初の重要なイニシアティブは、SPED を生成するためにシステムを稼働させ、新たに必要な情報を作成出来るかどうかを検証してみることである。問題が生じた場合には、製造、在庫管理に関する内部統制及びプロセスの改善などの対応が必要となる。

一般的な実務対処方法としては、ギャップ分析、既存の内部統制分析、そして、ガバナンスと内部統制を改善するためのアクションプランを作成することから始まる。何度も問題が生じる場合には例えば次のようなことが生じている可能性がある。”Registro 0200(品目識別表)”への 2 重登録された品目、製造に投入される代替品の内部統制の欠如、商品受領の不正確な手続、第 3 者在庫管理不足 など。

BLOCK K を対応するためには一定の投資も必要であり、また、税務当局へ更なる情報提供も必要となってくるためますますブラジルコストが高くなると思われるかもしれないが、一方で BLOCK K 導入が、内部統制の効率化、手続きの自動化、デジタル化を推し進め、企業の競争力を高める一助となることを願うところである。

ブラジルの思い出

田中克之

(海外日系人協会理事長、元サンパウロ総領事)



私の在外勤務で一番長かった場所はサンパウロだ。それだけに思い出も多い。私がいたのは1993年4月から97年5月。フランコ大統領、カルドゾ大統領の時期、年間2,000%を超えるハイパーインフレと（レアル・プラン導入により）急速にこれが沈静化していった時期である。また、95年が日伯修好100周年で双方の政府・民間が力を合わせ400近くの行事を実施し、その前後に清子内親王殿下下のブラジル訪問、カルドゾ大統領と橋本首相の相互訪問があり、両国の交流のレベルが顕著に高まった時期でもあった。

思い出の一つは、ハイパー・インフレーション時の風景。余裕のない給与生活者は、給与をもらうと直ちにスーパーマーケットに走り、食料などの生活必需品を一杯買うことになった。レストランでも、メニューの料理名はきちんと印刷してあるが、各料理の価格の欄は鉛筆書きになっていた。ところが、レアル・プランが導入されるや1年程で4桁のインフレ率が2桁になり、そしてその翌年には1桁になった。私にはまるで魔法がかかったように見えた。

同様に思い出すのは「日系社会の方々に本当にお世話になった」ことだ。サンパウロ勤務以前に私は日系人の多いロスアンゼルスやトロントの在勤経験があったが、サンパウロの日系社会の大きさ、日系人のネットワークの広さ深さ、現地社会への影響力は別格であった。94年は大統領選挙の年だったが、ブラジル日本商工会議所の月例会に有力大統領候補であったカルドゾ（PSDB）、ルーラ（PT）、クエルシア（PMDB）の3氏が（異なった月の例会ではあったが）現れ各々の考えを述べたのだ。カルドゾはまだ蔵相の地位にあったため、レアルプランの話が中心であったが、クエルシアとともにそのプレゼンテーションはとても上手だった。クエルシアが質問に答えて、「ルーラは基礎票が多いが、カルドゾは少ない。行政経験のない者には大統領は務まらない」と自信満々の態度であった。そしてルーラは「北東伯には一杯のオレンジジュースも飲めない貧しい子供達が一杯いる。ところがサントスの港からは日本向けにオレンジジュース専用タンカーが出ている。自分はこのジュースを先ず北東伯の子供達に飲ませてやりたい」と訴えた。内容の是非はともかく、各人の性格や知性が窺われる会合となった。しかし、主要な大統領候補を3人も呼びだすことは簡単なことではない。当時の商工会議所会頭は日系二世の伝田耕平氏（南米銀行頭取）だったが、日・ポ両語に通じ広い人的ネット

ワークを持つ伝田さんであったからこそ実現できたのであろう。

1995年は日伯修好100周年に当たり、サンパウロでも多数の記念行事が行われた。橋富士夫南米銀行名誉会長を委員長とし、主要日系団体をメンバーとする「日伯修好100周年記念事業サンパウロ日系協力委員会」が設立され、事業資金の獲得や、事業実施に向けて奔走した。指導力と包容力を兼ね備えた橋委員長やこの委員会メンバーの働きがなければこれだけの数と規模の事業実施は覚束なかったであろう。他方、サンパウロ大学が40件近い事業を自主的に行うとやってきた時は内心驚いた。私の問いにファバス学長が「日系人口はブラジルの人口の1%前後だが、私の大学の教員の10%、学生の15%は日系人、しかも優秀な人達。これくらいやって当然だ」と言ったので改めて日系人の重要性を再認識させられた。またブラジル三井の中村社長のご尽力で当初他の国での開催が予定されていた三井グループの「クローズ・アップ・オブ・ジャパン」プログラムがサンパウロで開催されることになり、柿右衛門展示会や和太鼓実演など極めて質の高い日本文化の紹介が実現できたのも嬉しいことであった。

先年99歳で他界したボンペイアの西村俊治氏も忘れない人物だ。同氏は1932年裸一貫で渡伯、苦勞の末に「ジャクト農機KK」を立ち上げ、ビニールの農業噴霧器や大型コーヒー収穫機械の製造で成功し、私がいた頃には人口2万人強のボンペイア市の住民1000人以上を雇用する同市最大の納税企業となっていた。同氏はブラジルへの恩返しとして、3年制の農工高等学校を設立し農業技術、農業経営のみならず機械が分かる若者を育ててきた。その訥々とした話し方と若者教育に対する情熱は人の心を打つ。日伯修好100周年の際には日本庭園を配した日伯友好広場を独力で作った。これが現在ボンペイア市の観光スポットの一つになっている。

2016年のリオ・オリンピックの開会式で、今日の多民族、多文化共生社会が出来上がるまでのブラジルの歴史を見せる場面があった。まずインディオの存在、ヨーロッパ人との出会い、奴隷として連れてこられたアフリカ人、中東からの移住者、そして一見して日本人・日系人と分かる東洋人のブラジル社会への融合の様子が演出された。ブラジルに移住した日本人とその子孫が今日のブラジル社会の重要かつ価値ある構成員になっていることを世界に示したものだ。私はお世話になった方々の姿を重ねながらこの開会式に見入っていた次第である。



ブラジル人はおしゃべり好き

大塚未涼
(ブラジル三井物産)

明るい国民性からも想像できるように、ブラジル人は基本的にとてもおしゃべり好きである。ネクラな人も極たまにいるが、その割合は日本と比べるとすごく低いと思う。さすがに時間にせかされていることの多い通勤電車の中やオフィスビルでしゃべりかけられることはないものの、公園やお店や路上で、時間にゆとりがある場面ではここぞとばかりにおしゃべりに付き合わされることがある。おしゃべりすることで気分転換になるのか、こちらが理解しているのか、ちゃんと聞いているのかを全く気にせずに、一方的に話をされることも多い。

ブラジルに移り住んだ当初通っていたポルトガル語教室で、先生に、ブラジル人から話しかけられたら、はい（Sim）といいえ（Não）だけで答えてはいけなと教えられた。はい、と、いいえ、だけで続かないととても冷たく感じられ、ブラジル人はショックを受けてしまう、というのである。この教えを受けて以来、ブラジル人に話しかけられたら、一言で返すのではなく、なにかしら言葉を付け加えるように努力

するようになった。しかし、元々無口で無駄なおしゃべりではない方だったため、気を抜くとコミュニケーションが足りないとブラジル人の旦那に今でも指摘される。日本人の間だとしゃべらなくても家族や親友なら意思の疎通が簡単にできたり、沈黙は金、といった言葉もあるが、ブラジルでは沈黙は罪である。黙っていると冷たい、愛情が足りないとすぐに思われてしまうのだ。

このようにおしゃべりな人たちに囲まれた環境で育つブラジル人は、基本的に皆とてもスピーチが上手で交渉も上手である。多くのブラジル人たちは全く準備なしでも土壇場でスピーチをこなしてしまう。ブラジルでは役所でも交渉が上手いかによって手続きができたりできなかったりということが起こるので、愛嬌あるおしゃべりの技術は、ある意味で生活のために必要な能力でもある。これはとてもうらやましいが、たとえ何年ブラジルで暮らしても彼らのレベルにはとても到達できそうにない。

ジャーナリストの旅路

ブラジルのこと

小宮智可
(NHK サンパウロ支局長)

赴任前、ブラジルはもっと、自由な国だと思っていた。底抜けに明るい人たちが、サンバを踊り、ルールも自由、常夏の国で治安も周りの人が脅すほど危険ではない。そんな国だと思って、赴任したのが去年の7月だった。実際のブラジルはイメージより、とても閉ざされた国だった。まず、輸入品がめちゃくちゃ高い。自国を保護するために、外国製品に多額の関税をかけ、アップルの携帯電話は、最新機種の上位モデルが20万円近くする。従業員の働き方もルールに縛られ、賃金さえ組合と相談しないと決められない。そして、公務員はあまり働かない。税関がゆるいストライキを2年以上して、去年6月に日本を出発した引っ越しの荷物が、家に届いたのは、今年に入ってからだった。

ブラジル人さえ、嫌気がさしていたこんな状況、どうにかできないかなーと考えていた頃、大統領選挙で支持率トップを走っていたのが、「ブラジルのトランプ」こと、今のボルソナロ大統領だった。私が赴任した去年の夏、地元の主要メディアは、「最後は、ボルソナロは勝てない」と断言していた。しかし、彼の主張は新鮮だった。ト

ランプ大統領のように、「ブラジルファースト」を打ち出し、保護主義に突っ走るのかと思いきや、やろうとしている事は結構まとも。経済は素人だと話し、学者に丸投げした政策は、「ブラジルを開かれた国にする」というものだった。彼の主張を多くの企業関係者は支持していたように感じる。もちろん、問題発言も多かった。ホームページには相手候補を、ここでは書けないような言葉で罵倒したり、フェイクニュースを連発したり。でも彼の支持は落ちず、とうとう当選してしまった。

そんな、ブラジルだが、ボルソナロ大統領就任後も全然状況は変わっていない。やったのは、銃の自由化くらい。ますます、治安が悪くなっている気がする。隣国のベネズエラからは大量の難民が詰めかけ、相変わらず治安も良くない。でもあまり気にしない。こんなに、みんな適当なのに、国が困っているようにも見えない。そんな懐が深い国ブラジル。だんだん好きになってきている気がする。このまま眠ったままかもしれないが、いつかブラジルが本格的に眠りから覚めて、もっとすごい、偉大な国になるの取材してみたいと思う。たぶんならないと思うが。

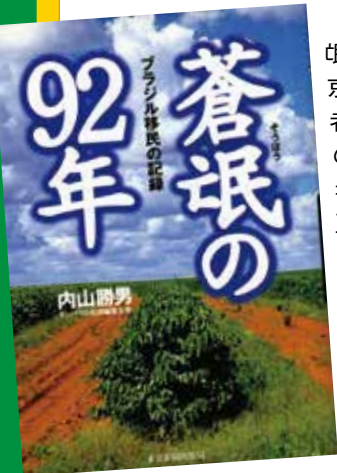
サンパウロ新聞の廃刊～73年に及ぶ歴史に幕

岸和田仁（『ブラジル特報』編集人）

編集主幹内山勝男の予言

「戦後、五紙もあった日本語新聞は三紙に減り、そのうち「バウリスタ新聞」と「日伯毎日新聞」は生き残るため合併して「ニッケイ新聞」と看板を変えた。戦後最初に創刊した「サンパウロ新聞」は最盛期には発行部数が四万部に達し、海外における邦字紙として最大の発行部数を誇ったが、現在半数を割り、釣瓶落ししの秋の夕暮れである。

一世のいなくなった日系社会は日本語新聞の終焉である。一方、混血の進行によって従来の日系人社会は形を変えていくことだろう。その日は目前に迫っている。」



これは、2001年1月に刊行された『蒼氓の92年―ブラジル移民の記録』（東京新聞出版局）のあとがきである。著者はサンパウロ新聞編集主幹（当時）の内山勝男。内山は、新聞創刊（1946年10月）から関わり、50年以上に亘って社説や一面コラム「余白」を書き続けた、サンパウロ新聞の看板記者であり、ブラジル日系移民の歴史とともに歩んできたジャーナリストであった。この著作のタイトルは、言うまでもなく第一回芥川賞（1935年）を受賞した石川達三『蒼氓』から来ている。というのも、

石川は移民助監督という立場で1930年移民船「らぶらた丸」に乗り込んだ体験をもとにこのリアリズム小説を書きあげたのだが、同じ船に乗り合わせたのが内山青年であったからだ。そんな移民史の生き証人の著書の最後で邦字紙の終焉を予見していたわけだが、この予言が、18年後に的中することになった。

サンパウロ新聞、ついに廃刊へ

2018年12月20日、サンパウロ新聞廃刊の社告が発表された。その主要部分を引用すると、「サンパウロ新聞は創刊以来73年間にわたり、読者の耳目となり、また日系コロニアのオピニオンリーダーとして微力ながら尽力してまいりました。しかし、新聞を取り巻く環境が大きく変化し、今年の12月22日に発行する今年最後の紙面及び2019年新年特集号（2019年1月1日号）を最後に廃刊せざるを得なくなりました。

近年、読者の急激な減少に加え、印刷、配送費の高騰により、新聞発行が困難となりました。新聞社としては、経営努力により、継続を模索してまいりましたが、新聞発行を続けるのは無理と判断し、廃刊を決定した次第です。（後略）」

サンパウロ新聞といえば、かつて購読者数4万（公称）

ともいわれた時期もあった、海外で最大の日本語メディアであっただけに、この社告は高齢の定期購読者ばかりでなく、かつて邦字紙に世話になった元企業駐在員たちにも衝撃を与えたといつてよい。エスニック・メディアというものは、一世購読者数が減れば消滅するのが当然、と社会学者が論じたところで、この廃刊は理性では了解できても、心性では受け入れられないからだ。

サンパウロ新聞の歴史的意義

ブラジルの邦字紙が最盛期を迎えたのは1970年代であった。当時の購読者数は、サンパウロ新聞は4万、バウリスタ新聞は2万、日伯毎日新聞も2万といわれていた。インターネットもなく、通信手段は電話・電報かテレックスの時代だったから、移民一世ばかりか不勉強な企業駐在員にとっても邦字紙は有力かつ重宝な情報源であった。

そんな邦字紙全盛時代は、どの新聞もそれぞれの個性を発揮しながら紙面を工夫していたから各紙を比較しながら読む楽しみがあった。1979年ノルデスチに着任した筆者はサンパウロから郵送されてくる数日遅れの邦字紙を貪るように読んだ記憶がまだ鮮明である。そんな三紙のなかでも、政治経済の解説記事でも連載もの（小説や博物誌）の多様さでもサンパウロ新聞が一歩先を進んでいた。多くの読者が愛読した連載物からいくつかメモしておこう。

まず、醍醐麻沙夫の『森の夢』（1979年）。平野運平は、笠戸丸移民に付き添った通訳5人男の一人で、日本人植民地第一号の平野植民地を苦闘の末切り開き、志半ばにして34歳で病没したが、ブラジル移民史において必ず語られる快男児だ。その壮絶なる開拓史を純文学タッチで小説化した佳品であり、北杜夫も『輝ける碧き空の下で』のあとがきで絶賛している。

在野の博物学者、中隅哲郎（1936-2000）の軽妙洒落な文章群は今思うに「ブラジル研究の知的無形資産」と呼べるような多様にして豊かな世界を形成していた。1984年連載の『ブラジルの食べもの考』（全50回）の食文化解説には目からうろこが落ちたが、長期連載記事はいくつもの単行本（『パンタナール』、『ブラジル学入門』、『ブラジル観察学』、『ブラジル日系社会考』、いずれも無明舎）にまとめられている。

100周年記念出版の『ブラジルへ渡った100人の女性の物語』（2009年）も貴重な記録集であった。

サンパウロ新聞の盛衰史は、まさに出稼ぎから定住・同化へと変遷してきた日系移民史そのものだ。その廃刊も歴史の一環となったとは、痛恨の極みというしかない。



ブラジル政府の鉄道計画

1月21日付フォーリャ・デ・サンパウロ紙は、ブラジル政府の鉄道事業のコンセッションについて報じている。記事概要以下のとおり。

1) フレイタス・インフラ大臣によれば、イニシアチブにより、2025年までに交通網における鉄道のシェアは2倍になる。昨年のロジスティックス企画公社（EPL）のデータによれば、ブラジル国内物流の約15% 鉄道が占めており、65% を道路が占めている。

2) 大臣は、政府は野心的であるが実現可能なプログラムにより鉄道輸送を回復させると述べ、3月にポルトナシオナル（トカンチンス州）とエストレラドエスチ（サンパウロ州）を結ぶ南北鉄道の入札が開始されるとしている。目的は、マラニョン州のイタキ港とサントス港（サンパウロ州）の連結である。

3) 2019年から2020年初めの間に公示することが約束されているのは、バイア州のカエチテからイリエウスの路線（東西統合鉄道）、及びマトグロッソ州の農業生産に裨益する穀物鉄道（マトグロッソ州のシノッピからパラ州のミリチトゥーバ）の入札である。

4) 大臣は、「輸送費に大きなインパクトを与えることから、アグリビジネスの第二次革命と言える」、「道路からトラックを減らし、ブラジルコストを削減し、貨物輸送を効率化したい」と述べた。

5) この制度により建設される最初の鉄道は、アグアボーア（マトグロッソ州）とカンピノルチ（ゴイアス州）を結び、マトグロッソ州と南北鉄道を連結する。

6) 大統領選挙後、ボルソナーロ大統領のチームはテメル政権からロジスティックスを含む様々な分野の戦略的情報を受け取っていた。テメル前大統領のチームは、輸送の効率性を高め、2018年のトラック運転手のストライキのような物流麻痺への脆弱性を減じるため、国内のロジスティックス拠点の集中について再検討するとしていた。

7) 同分野における投資が不足していることの証左として、2018年の運輸省の事業予算として見込まれている105億レアルのうちわずか7% が鉄道事業に当てられた。道路は予算の66% を占めている。

ボルソナーロ大統領のダボス会議開会セッションにおけるスピーチ

1月21日、ボルソナーロ大統領はダボス会議開会セッションでスピーチを行った。概要以下のとおり。

1) 先の大統領選で、自分に与えられたテレビの政見放送は8秒（1日あたり）であり、自分が消費した選挙資金は100万ドルに満たなかった。私は終始不当な攻撃に晒され続けたが、勝利を収めることが出来た。私は、ブラジルが、倫理、道徳、経済的な深刻な危機を迎える中で大統領に就任した。そして私はブラジルの歴史を変えると約束している。

2) ブラジルは、最も豊かな自然を有する世界有数の国である。しかしながら、世界で最も多く訪問される観光地の上位40位には入っていない。新政権は、誰もが家族とともにブラジルを訪問できるよう、治安対策に大規模な投資を行っていく。アマゾン、ビーチ、町並み、パンタナールを是非見に来て頂きたい。ブラジルが楽園であることは未だ殆ど知られていない。

3) ブラジルは、環境保護も進めてきた。ブラジルほど多くの森林を有する国は他に無い。農業は、国土の9%しか使用しておらず、それでも技術進歩と農村生産者の努力によって成長してきた。家畜に使用している土壌も20%に満たない。しかしながら、ブラジル産品は、大部分で貿易収支黒字を実現し、世界各地に食料を供給している。環境・生物多様性の保全と、必要な経済発展の両立度を高めていくことは、ブラジルの使命である。新政権を批判する人達は、むしろ我々から多くを学ぶであろう。我々は、かつて世界がブラジルに抱いていた信頼を改めて獲得できるよう、政権を担っていく。

4) 新政権は、税負担を軽減し、規則を簡素化していく。製造、起業、投資、雇用創出に携わる人々を支援していく。マクロ経済の安定、契約の尊重、民営化、公的財政の均衡のためにも取り組んでいく。また、伯経済は相対的に国際貿易に対して閉鎖的であり、こうした状況を変えることも、新政権が掲げる最も重要な公約の一つ。私の任期の終わりまでに、パウロ・ゲデス経済大臣率いる経済チームが、ブラジルを、ビジネスを行う上位50か国にランクインさせてくれるだろう。

5) 新政権は、ブラジルの価値観を保護し、経済を開放していく。家族と真の人権を擁護し、生命と私有財産の権利を保護していく。貧困と悲惨さを減らし、若者が知識によって第4次産業革命に備えていくための教育も推進していく。

6) 我々の行動は、ブラジルのみならず、世界の利益になることを信じて欲しい。我々は両手を広げている。私は、偉大なブラジルよりも、平和で自由な民主的な世界を求める。「何よりも神のために」というモットーで、我々の関係が万人に無限の進歩をもたらすことを確信している。

新刊書紹介

◆◆◆◆◆ 新刊書紹介 ◆◆◆◆◆

『まなざしが出会う場所へ』 (渋谷敦志著)

「越境する写真家として生きる」ことを選択したフォトジャーナリストがブラジル、アフリカ、アジア、震災後の福島を記録しながら思索を重ねた旅を語る。学生時代セバスチャン・サルガド写真展に衝撃を受けた翌1996年サンパウロの二宮法律事務所でのインターンシップを体験した著者は、「国境なき医師団」の活動に共鳴し写真家として歩み始める。飢餓や災害の現場の凄まじさに言葉を失いつつ、生真面目に希望を追求する姿にアッパレを。(新泉社 2019年1月 336頁 2,000円＋税)

『あけましておめでとう』

(フーベン・フォンセッカ著、江口佳子訳)

「ブラジル現代文学コレクション」第5弾は、1975年に出版されるや、たちまち三刷(3万部)とベストセラーとなったものの、翌76年には軍事政

権より発禁処分を食らった話題作だ。猥褻で「公序良俗」に反するから、というのが発禁理由だったが、本書に収録された15の短編作品のどこにも男女が絡み合う濃厚な性描写なぞ一行もない。本書は、現代の読者にとっては、ほぼ半世紀前のリオの社会状況を知るための“文学的史料”であろう。(水声社 2018年11月 256頁 2,500円＋税)

月刊『数学セミナー』(2019年1月号)

2018年8月上旬リオで開催された「国際数学者会議(ICM)」特集号。フィールズ賞を受賞した三名(クルド系イラン人ビルカー、イタリア人フィガッリ、ドイツ人ショルツェ)の業績紹介といった専門論文は門外漢にはチンプンカンプンだが、冒頭の藤原京都大学教授による「ICM2018滞在記」は面白い日記風エッセイだ。火災で会場が急遽変更になっても無事開催、ビルカーの受賞メダルが盗難されたが解決、とブラジルの丸く納まったのだ。(日本評論社 2019年1月 95頁 1,090円＋税)

『バトゥーキ』(迫稔雄著)

週刊ヤングジャンプ連載中(2018年7月より)の、日本初(世界初?)のカポエイラを正面から描いた漫画作

品がまとまり、第一巻、第二巻が刊行された。第三巻は3月刊行予定。格闘技実践者の著者が現地(リオとサルヴァドル)取材でカポエイラを実体験した成果が漫画に反映されているため、ストーリー展開のなかにブラジル事情解説も織り込まれている。主人公三條一里がカポエイラを通じて成長していく青春物語である。

(集英社 第一巻、第二巻いずれも2019年1月216頁 540円＋税)

『ヨーゼフ・メンゲレの逃亡』 (オリヴィエ・ゲーズ著、高橋啓訳)

ナチス親衛隊大尉にしてアウシュヴィッツ強制収容所医師の「死の天使」メンゲレは、ナチスドイツ崩壊後アルゼンチンに逃亡、その後パラグアイでの生活を経て、ブラジルへ。サンパウロ州セーハネグラで隠遁生活をしていたが、1979年2月7日ベルチオガ海岸で溺死、エンブー墓地に埋葬。1985年法医学者によって遺骨を本人確認、といった逃亡生活の実態に基づく「ノンフィクション小説」。ブラジル現代史の一端としても読める作品だ。

(東京創元社 2018年10月 254頁 1,800円＋税)

!!「びっくり豆知識」!!

ブラジルはスイスのようにはなれない

永世中立国スイス。森と湖とアルプスに抱かれた平和で安全な国である。言語はドイツ語とフランス語と現地語が交じり合う。厳格な国と思いきや、路上喫煙やゴミ対策など生活に根差すところは、いたっていいかげん。皆のんびり、堅苦しいところはない。

戦火にまみれた歴史を持つ欧州大陸でどうやって中立を保てるのか。子供に説明するのも難しいが、理由のひとつは徴兵制とそれを背景にした銃所有の自由ではないか。スイスでは840万人の人口のうち200万人が銃を所有(携行は許可制)しているという。ただし兵役で使った軍用ライフルなどを自宅に置くケースが多く、ピストルは少数派だ。いざ戦争となったら「国のため」に武器を取り出して戦う。殺人事件がないわけではないが、件数は極めて少ない。

世界で銃所有を認める国はスイスのほか、アメリカ、ブラジル、カナダ、ノルウェー、スウェーデンなど。逆に銃所有を禁止する国は英国、ロシア、日本、中国、オーストラリアなど。仮に、銃を個人の抑止力とする「スイスモデル」があるとすれば、恐ろしげな攻撃的銃社会を広げたのはアメリカだ。米国憲法修正第2条の「武器を保持する権利は侵してはならない」とする条項をたてに、全米ライフル協会という圧力団体が政治家を動かして、武器大国となった。その結果と言うべきか、アメリカの銃

による犠牲者は年間1万人以上にのぼる。

そんな中でブラジルのボルソナール大統領は年初の就任直後、銃規制を大きく緩和する大統領令に署名した。25歳以上なら1人4丁まで銃を持つことができる。これまでも法律上は銃所持が認められてきたブラジルだが、銃による犠牲者数はアメリカの4倍レベルだ。新大統領はこのままでは治安の回復は無理と判断したのだろう。しかし、大統領令がそんなにうまく機能するだろうか。

新大統領は「自分の身は自分で守ろう」と銃規制を緩和した。アメリカと同じ「撃たれそうなら撃ち返せ」というわけだ。何が起ころのか容易に想像できる。今後はブラジルでの銃取引が増え、被害がさらに拡大するのではないか。新大統領は1月のスイスのダボス会議で銃所持に関するスイスの現状を知り、意を強くしたかもしれない。しかし、「銃を持つ意味」を間違っ

て解釈した可能性もある。スイスをめざすなら銃の数を増やすよりも、国家の政治的、経済的な安定を図る方が先決だ。極右とされる新大統領は銃規制でもトランプ氏の剛腕をマネるつもりらしい。ブラジル新政権は経済政策に限っては世界のマーケットから好感されているようだ。でもボルソナール氏の“トランプ傾斜”は国を危うくする恐れがある。今のままではブラジルはスイスのようにはなれない。(W)



価値を生み出す厳選された情報

中南米経済速報

経済情報を毎週月曜日にお届けします。地域経済圏の動き、インフラ整備やエネルギー・資源開発、各国のマクロ経済、投資案件、労働問題などを日本語でお読みいただけます。

■購読料：14,000円/月(税別)

CRONICA (クロニカ)

政治・治安情報を速報でお届けします。月～金に速報版を、火・金にレギュラー版を配信します。社会情勢、犯罪情報、武器密輸、麻薬問題、自然災害などを取り扱います。

■購読料：30,000円/月(税別)



日本ブラジル中央協会 からのお知らせ

協会イベントのご案内

イベント参加のお申し込みは、協会HP専用フォームにてお願いします。

3/9

ブラジル 駐在員家族(駐在妻)のための渡航前セミナー

日 時：2019年3月9日(土)
1部/ 9:15-12:30(子女帯同なし/3時間15分)
2部/14:00-18:00(子女帯同あり/4時間)
参加費：会員(配偶者含む)3,500円、非会員 4,500円
場 所：日本ブラジル中央協会 会議室
住所：東京都港区新橋1丁目18-2 明宏ビル本館5階

3/18

Eduardo Saboia 駐日ブラジル大使 歓迎会

日 時：2019年3月18日(月) 18:00受付開始、18:30開演
参加費：会員 10,000円、非会員 12,000円
場 所：帝国ホテル 本館3階(雅・錦の間)
〒100-8558 東京都千代田区幸町1-1-1
主 催：日本ブラジル中央協会、在日ブラジル商工会議所

3/5

会員交流懇親会

今年初めての会員交流懇親会を開催致します。Cafe do Centroにてブラジル料理を楽しみながら、会員同士交流しましょう。

日 時：2019年3月5日(火) 18:30～
参加費：会員 3,000円(飲み放題付)
※一部当協会にて助成しております。
場 所：Cafe do Centro
千代田区丸の内 3-1-1 帝劇ビルB2F

2019年
4月
開講

ポルトガル語 春期講座

充実した講師陣により、全8コース開講予定

間もなく
募集開始

当協会では、“楽しく学ぼう!学んで話せるポルトガル語!”をモットーに実用ポルトガル語講座を開講しております。ポルトガル語を初めて学ぶ方のためのコースも2つ用意する予定です。

- 受講料 【全13回又は14回】会員 32,500円(税込)又は 35,000円(税込)
※隔週土曜会話クラスは半額
- 会場 日本ブラジル中央協会 事務所 東京都港区新橋1丁目18-2 明宏ビル本館5階
- 申込方法 3月前半に協会ホームページにアップし次第、申込フォーム(<http://nipo-brasil.org/portugal/request/>)よりお申込ください。※受付は申込先着順です。

日本ブラジル中央協会ウェブサイト

<http://www.nipo-brasil.org>

当協会の隔月発行の機関誌「ブラジル特報」及びホームページへのバナー広告掲載企業を募集しております。広告掲載にご興味がある企業は、協会事務局までご連絡下さい。事務局 E-mail : info@nipo-brasil.org





BRASILICAGRILL
CHURRASCARIA

2019年春
新店舗にて営業開始

brasilicagrill.com

赤坂見附店は移転いたしました。
詳細は次号、この誌面にてお知らせいたします。
ご期待ください。



TRADE & DEVELOPMENT BANK
モンゴル貿易開発銀行東京駐在員事務所

“蒼天よりも高く”

突き抜けるような雲ひとつない青い空 — 蒼天(そうてん)
モンゴルは蒼天の国です。そのモンゴルでリーディングバンクとして活躍している銀行がTDBです。日本とモンゴルの間の貿易・投資に関わる貿易金融や外国為替を取り扱っています。私たち東京駐在員事務所はモンゴルの蒼天につながる日本の玄関口です。日本のお客様からのご相談をお待ち申し上げます。



モンゴル貿易開発銀行東京駐在員事務所

〒100-0005 東京都千代田区丸の内1-4-1

丸の内永楽ビル2303

TEL: 03-4588-3945

FAX: 03-4588-3947

<http://tdbm.jp/>

詳しくはコチラ→



◎ 最寄り駅: 東京メトロ東西線大手町駅B1出口直上





^{てつ}鉄は金属の王なる哉

鉄は文明を開き、社会を支え、そして未来を築くためになくてはならない素材です。

新日鉄住金は世界最高の技術とものづくりの力で鉄の可能性を極限まで追求し、

“総合力世界No.1の鉄鋼メーカー”をめざしています。

だからこそ私たちは、「鉄」の文字の意味合いを「金属の王なる哉」と受けとめ、

総合力世界No.1への意志と誇りをこめて社名ロゴに使用しています。

